
戦場の管理者

廣瀬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

戦場の管理者

【Zコード】

Z4530W

【作者名】

廣瀬

【あらすじ】

突然軍隊に攻められた街。銃声と殺戮の場となつた街に住む少女が知つた、あまりにも恵まれすぎた街の秘密。たつた一人真実を知る少年が、その秘密を暴露したとき、生存者は決断を下す。

地下一階や二階とは比較にならない、広い空間に来てとても驚いた。いま自分たちのいるのが山中だなんてとても信じられない。電気をつけたとたん光り輝いて私たちを出迎えたのはドーム型の天井にはめこまれた巨大クリスタルのシャンデリアで、リノリウムの床にステンレス製のパネルで覆われた壁、白いベンチ、いずれも一本しかない架線の設備としてはじゅうぶんすぎた。目隠しをされてつれてこられたなら、どこか大都会の地下鉄の構内といわれても納得しただろ？

おそらく一度か、多くても二度以上は使われない目的のための山中駅　それが豪華で凝つていればいるほど、私たちが報いをうけたのだということを思い知った。その報いが過大であつたか過小であつたか、私たちの感じたところはさておき、専用の列車に乗る権利のあるものはことじとく、口をそろえて私たちが悪いのだというだろ？

「交代で、あかりを持つて進もう。つかれたら休憩する。たぶん數十キロだと思うけどどれくらいかかるかわからないから、線路の上を歩くより端のほうがいい、平らで足も痛くならないから」

互いに協力して車両のない線路に降り立つと、全員が、進む方向を見つめてほぼ同時にため息をついた。暗いトンネルの先は闇より深い無だつたが、それでももはや行く以外にてだてはない。

今後、私たちが裁かれるのだとすればどうやつてなのが、あの殺戮以上の方法でか　しかし、固定概念とか正義とか法律とかともにおそれる気持ちも麻痺していて、すでに放蕩以上のおそれるべき罪を犯したというのに、なにかはればれとしているようでもあった。

小さな手を握り返して、歩き始める。

そのうちに、ぱつりぱつりと誰からともなく事情を話し始めた。人魂のようになかばそいともじびが導く闇夜行路に、吐息と靴音だけのみぢづれではさびしくて仕方なかつたのだ。

中年女性と青年、そして小学生が語り終え、町中でもつとも罪が深いであろう萱森が話し始めたとき、とくに注意深く、四人は一言も聞き漏らさないように耳をそばだてた。声変わりをすませて久しい彼と私はずつと同じクラスで過ごしてきたはずで、事情もよく知つていいのに、はじめて聞く声のように思えた。

彼の拳銃は、もともとおじいさんが留学していたとき手に入れたもので、金庫にずっと大事にしまつてあつたそうだ。これまで折に触れて取り出してはよからぬことも考えたのだが、いちばんいい時に使ってよかつたとぽつりと呟いた。たつたひとり事情を知りながら口をつぐんでいなければならなかつたつらさや申し訳なさは、いつたいどれほどものだらう。引き金をひいたときの形相から、全員が彼の苦しみを知つて、この期におみんでもつ責めることはしない、とそのとき決めた。

すべてを語り終えた、ランタンをもつ背中から清潔な水のにおいがする。

全員でボタンを押したあと、倦怠と虚脱が支配した部屋で誰かがした建設的な提案は、入浴と食事をとることだった。浴室をひっくり返して調べたところ、管理人のもの以外にもさまざまなサイズの新品の服や下着、なぜか女物の着替えも一式そろつていて、持ち主はもう生きていないのでだからという年長者のすすめにしたがつて、私は、着ていたものをすべてとりかえることにした。しみついた汚れや体液を洗いおとして手当もすませ、はじめて食べるインスタントラーメンで腹ごしらえをしたときには、あまりにも幸福すぎてめまいさえ感じたほどだ。

線路はまっすぐ続いている。国民の血の税金を湯水のごとく使つたいたれりつくせりの生活が、私たちを囲い込むための檻だったの

だといつことが、今でははつきりとわかつた。

私の番だ。

背中にしょったリュックには、ありつけの食料と着替えと、脱いだ制服がいちばん下にある。夏用の薄いシャツとスカートおよび紺色のネクタイを、萱森は雑巾以下と断じて迷わずダストシートに放つたけれど、私はもう着られないとわかっているのに捨てられなくて持つてきてしまった。

いまやみんなと同じで家族を失い、容姿にも頭にも恵まれていない、ただの十七歳だった私の話は……

海と山こなされた小さな町の、たつたひとつの中学校に通う身にしては珍しく、どこかほかの大きな街に住みたいとかいう気持ちはまるでなかつた。それは、海辺でソフトクリームをほおばつているとき特にしみじみと思う。

かんかんやりの太陽がつくるソテツの木陰で素足をのばし、スカートのひざに課題図書、だけど読む気はぜんぜんなくて、もっぱら自転車のハンドルにぶらさげたラジカセから流れるポップスを聴いている。目の前は、夏休みの小学生たちでにぎわっていた。ごみや漂流物のない白い砂の浜はしっとりと輝いて清潔だ。町の住人しかこないからとてもよくて、テレビで見る南国の海にもひけをとらない水の透明さは、思わず飛び込んでみたくなる。

まあ、私はしない。女子高生だから。日焼けもきになるし。

制服姿でなければ満点のシチュエーションで、約束の時間が来るまでそうしていた。

「遅いよつまあちゃん」

町のはずれにどかんと建つてゐる広いショッピングモールは、雑

誌に載つてゐるブランドの服からガムテープといった日用品まで何でもそろつ。立派なレストラン街もあつて、外食というともつぱらここに来ることになる。買い物のついでに入れる安価なフードコートも併設され、学生には、見た目のいいファーストフードを扱うジューススタンドが人気だ。

広いエントランスを抜けてフードコートを見渡すと、案の定、スタンド前のテーブルにいた先輩がこちらにむかつて手を振つた。艶のある茶髪の上に、天井から光が差し込んでいる。近くにある噴水に反射して、ただでさえ美人なのにかさねがさね美人だ。

先輩は、制服姿の私をねぎらつたあと、メニューを指差した。

「なんか飲む？ ねえ、さつき海岸にいたでしよう。車から見えたんだ」

「ということは送つてもらつたんですね。この暑い中、私なんか自転車こいで来たのに」

「いやん、だつて暑いんだもん」

休み明けの体育祭で踊るダンスの曲はもう決めてある。あとは振り付けだけだ。ジュースを飲み終わると、先輩は立ち上がり、制服の上だけ派手なシャツ姿で踊り始めた。

「ひつきてこうきて、こうね。今、紙に動きを書いてたんだけど、曲のテンポとどうかなって」

私は、持ってきたラジカセから音楽を流した。まわりに誰もいないので、スタンド前の円形広場はステージさながら踊りの練習場所になる。ひとつおり教わつて一緒に踊り終わると、スタンドにいた店員が拍手てくれた。

私は知つている。この店員が先輩の恋人だということを。高校の、たしか三つ上の先輩で、通信教育で大学の講義を受けながら働いているのだ。勤労青年は口笛まで吹き、先輩に向かつて満面の笑みで手をふつた。

「細かいフリーはどうですかねえ。中学生もいるし……半年前まで小学生だったんですよ。そろいます？」

「そろえないと話にならんわね。ただでさえ少ないので」

最後の体育祭だから、先輩ははりきっている。彼女は卒業したら都会に行くのだ つまりもうもどつてこないということ。試験に合格した人だけが町の外へ出てゆけるから、その学力は単純にうらやましかつたが、なんでこんなに住みよい場所をみずから捨ててゆくのか理解に苦しむ。

帰り道、自転車を押しながらそういうと、先輩は笑つて否定した。「捨てるとかじゃないのよ。ここは何でもそろいすきてて、そりやとても便利だと思う。けど、卒業したらみんな同じように同じ場所で働いて、ずっと同じ場所に住み続けて、っていうのは別の生きかたに興味があつただけ」

山から海へと太陽のバトンが渡され、次のランナーである月が夜を走りだす。この世のすべての美を並べてもたりない、永遠が疾走する風景。ここよりみちたりた場所はない。都会の喧騒、ビル群、おおぜいのひとびと、そういうものに憧れる先輩の心は心として漠然と理解したが、自分はけしてそれを選ばないと再び思った。

街灯とともに、黒い山陰にも明かりが点る 大昔からある施設の光だ。炭鉱時代の坑道が残つていて、国によつて試験的に残された元鉱山。小さな施設を、今でも誰かしらが管理している。小学校の遠足でみんな行く。あれを見ると、私はいよいよ夜だと思つて気があせる。甯闇に追われるようになに足を速めた。

ぶきみなぐらい静かだつた。山道はなだらかなカーブをえがいて、このまま永遠に続くようだ。シャツやスカートはおろか、その下に身につけた下着にいたるまで、粘膜を刺激する油っぽいような汚れた水を吸つてひどく体が重かつた。全身からただよつ悪臭に、さつきいちど吐いたのにまた吐きそうになる。道の途中には、だいたいの日安となるキャンプ場へ行く細い通路、遊歩道のようなものがあ

るはずだが、まだ見えない。

一瞬、悲鳴のようなものがきこえてびっくりと背後を見た。登つてきた山道が暗い縁に飲み込まれていて、体力の限界はとっくにこえていて、もう涙も出ない。

大きく息を吸い込んで、再びゆっくりと歩き始めた。何も考えないようにしようと思ったが最後、同級生たちはどうしただろうかと心配になる。ゆりかにあいな、みちる、えりか、りんちゃん。大野に戸高に三沢、萱森、鈴木。みんな、あの炎の中にいるのだろうか。そして家族も、と考えたとき、やはり空耳でない泣き声に気づいて私は立ち止まる。背後からではなく、まぎりくねったカーブの見えない先から　　どうやら子どものものだとわかると、急ぐ理由ができるこんな状況なのにむしろ嬉しかった。すくなくとも、これでひとりで死ぬことはないから。

新学期がはじまる、学校は体育祭一色で、小さな町も、さながらお祭りを迎えるように浮き足だつ。町にただひとつの中学校と高校は、敷地を同じくしている関係上あたりまえのように運動場も共同で、学生の数が足りないからついでに体育祭もいつしょとなると、すくない人数が裏目にでてさらに忙しい。当日に教師が注文する弁当屋のごようきや、モールの中にあるスーパーの店員が必要なものの届けにきたりで、この時期の校門はつねに空きっぱなし、用務員のおじさんもいちいち来客に身分をたずねることをやめてしまい、警備員室で白河夜船のボートに乗る。

先輩はたつた十二人しかいない最上級生のひとりとして采配を振るっていた。体育祭まであと一週間とせまつたその日、校舎に運び込まれるテントの資材をかついでいたのは、卒業生として手伝いに来た先輩の恋人で、まだ練習中だというのに人目もばからずにいちゃいちゃしあげたので、同級生の男子がいやな顔をした。

「どうせ遠距離になつたら別れるんだろ。いいよな、外に行くひとは」

卒業したら先輩が大都市へ進学するということは誰でも知っている。外見も頭も性格もいい、ものわかりのいい年上の恋人まで、というねたみは男女問わざあつて、特に、勉強ができないグループからは、よくその声が聞かれた。幼稚園から高校まではどうしてみんな一緒に、幼馴染同士のばかばかしいような文句ではあつたが、昔からお互によく知つているから先輩でも遠慮がない。萱森というそいつは、入場門に巻くビニールテープを抱えて、わざとらしく、カツプルのすぐ脇を通つていった。

九月だというのに暑い。担任の差し入れのスポーツドリンクを紙コップで一気飲みする。

中学生の女子たちは、校舎の陰で手拍子にあわせてダンスの練習をしていた。私を見つけると、何人かが困った顔で寄つてくる。まだ大人になりきつていらないあどけない表情で、全身汗だくだ。

「まあや先輩、三回半ですか、四回ですか」

「もういやだ、できない、間に合わない、わかんない」

「三回半だよ。大丈夫だから、ゆつくりやってみて」

彼女たちが、私のことを先輩の腰ぎんちゃくだと思つているのは知つていたが、年上として一応尊敬してくれるようだ。それにどうも、気軽に呼び出せるクレームの窓口とみなしている。なぜ振り付けした本人が来ないのかという不満が、彼女たちの無言につかがえて、困つて先輩のほうを見ると、ようやく美人はこちらを振り向く。勤労青年が、軽トラックのほうへ去つていくところだつた。「ごめんねえ」と陽気に走つてくる彼女の向こうに、白い入道雲がそびえたつて、ぶわ、と湿度の高い風が砂煙を巻き起こした。

「あ、痛」

コンタクトはこれだから。私は田をこすらないようにしながらまぶたを押さえ「ちょっと」と手を振つて、その場を投げて水のみ場に向かつた。めんどうさがりの私は、体育祭があまり得意でなく、

ショッちゅうコンタクトを理由にさぼつたりするのだが、今回はほんとうだった。激痛をこらえながら、昇降口の横の水場に急ぐ。

破裂するような先輩の手拍子と、幼い踊り子たちがきやあきやあ言いながらステップを踏むさまは、カビのにおいがする洗い場でもわかつた。恋人たちの逢瀬を邪魔した萱森が、今度は男子の騎馬戦で使う鉢巻のダンボールを抱えて「かわうそ、水浴び」といながらグラウンドへと通り過ぎていく。続いて聞こえてきた、くくつという笑い声に振り向くと、一クラスしかない、同じく同級生の三沢が、別のダンボールを持って親友のあとを追つていいくところだつた。何か動物の顔まねをしている。たぶん私のあだなである川獺の真似なのだろうがちつとも似ていない。あほか、といおうとしたが、彼の表現したとおり、目と一緒に顔中も水びたしにしていたのでやめた。

「雨だ」

グラウンドにもどると雨が降り始めた。担任が出てきて解散を告げる。風邪をひくなよといわれながら、私たちは学校を追い出された。あわてて着替えたせいではけなかつた靴下を路上で履き、明日ははれるといいねと笑いあいながら先輩と一緒に帰つた。体育祭まであと一週間にせまつていた。

毛布にくるまつた私の上から優しげな声が降つてくる。けして頭がいいといえない私でも理解できる言葉だつた。

「ここにたどりついたのは四名だけです。あとはみんな海岸へそちらは全滅です。ええ、火を見ると水のある場所へ行きたくなるものなのでしょう。次のフィールドで応用できるかもしれません。ええ、保護しておきます」

生存者たちに差し出されたカップは、有名なコーヒーチョーン店が、毎年桜の季節にフェアで売り出しているものだつた。おおげさ

な音をたてるスーパーの袋から、相手はクッキーを出して全員に配つた。こげた髪を落ち着きなくなりつけっていた中年のおばさんが袋を受け取つて泣き出す。つられそうになつたけれど、ぐつと我慢して、となりで力なくうなだれる小学生らしき男の子の頭をなでた。山道で一緒になつたのだが、そのときから私よりずっと心細い様子で心配だつた。彼は顔をあげ目を大きくみはつた。どこかで見たことがある子だと思つた。

「あと三時間で田没だな。君たちのほかにも、あとから来る人がいるかもしない」

暗く静かな部屋に、すすり泣く声と機械類のたてる低いモーター音が響く。背の高い棚にびつちりと貼り付けられた薄いモニターに、さまがわりした町のあちこちの映像が流れている。こんなにもたくさんのかameraに、私たちは見られていたのだと果然とした。まつたく気づかなかつた。

「お茶のおかわりがほしかつたらいつてくれ」

モニターが放つぎらぎらしい光をまとつた人物は、おちついた様子でアームチェアに腰かけ、気楽そうにしていた。

男の子が握りしめていたものがふと目にはいる。ブランド物の紙袋のきれはしだ。底が破れているので中身は道すがら落としてしまつたのだろう、からつぽだつた。子どもに不釣合いな高級ブランドのロゴマークに、私はついこのあいだ家族と交わした会話を思い出した。

高校にもなつて親が体育祭にお弁当をもつてやってきて、親戚までそこに加わるといつのは恥ずかしい。しかし、昔からの恒例だ。はりきつているママが電話口で「じゃあ太巻きとおいなりはお母さんお願ひね。うちはハンバーグとから揚げと、子どもの好きそうなのを持つしていくわ」と早口で言つ。パパが「ビールはひとケースで

いいか聞いてくれ」とソファから大声をあげた。

小学生の弟が、いいなあを連発して私にまとわりつく。娘に甘いパパが、体育祭の百メートル走で三位以内に入つたら、新しい通学用バッグを買つてくれると約束したので、さつきから機嫌が悪いのだ。

「僕だつてあたらしいゲームほしい。僕のかばんだつて幼稚園のときから使つてるやつだもん、ずるい、まあやばっかり、ずるいにするいづるい」

「えいたは誕生日にちやんとゲームもらつたでしょ。まだクリアしてないのにそんなこといわないよ」

「もう最後のラスボスだもん、明日終わつちやうもん」

すねて、ママのスカートにまとわりつく。僕もいいでしょお願い、という懇願を、ようやく受話器を置いたママは制止するかと思ったら、逆にパパに向かつて「私も新しいバッグほしいわ」と言い出した。

「ブランドの秋モデルがね、どうしても……。このあいだお店にいつたら、店員さんが、奥さまは絶対これ買われると思いますよって。入荷したら、私のぶんをとり置いてくれるっていうのよ」

モールの高級ブティックに新モデルを見に行くのを、ママは毎月楽しみにしている。もう何十個もあるバッグやポーチ、ハンカチは、順々に私のものになる。期待をこめてパパを見ると、パパは「しようがないな」とうなずいた。

「わかったから。えいたも、ほしいものがあるならちゃんとママにお願いしなさい。ただし、二人は来月の給付金が出るまで待つんだよ。まあやと先に約束していたんだからね」

「はあい」

私たちのほしいものは、頼めば最終的になんでも買つてもらえた。国指定過疎地域であるこの町は、政府から手厚い補償がされている。都會とかわりない生活と所得を保てるよう、給付金をはじめ、あらゆる補助、福利厚生が整っていた。パパのお給料も、何割かは

国が会社にかわって出しているのだ。今住んでいる家だつて国が建ててくれた。

この町に住むかぎり、日々の暮らしに困ることはありません。

地下に核廃棄物でも埋まつてゐんじやないかといつ冗談はよくあつた。あまりにもめぐまれすぎているから。

室内プールやサウナ施設、スキー場など、町にんげんだけではぼ貸切のように使える。こついつても、人が少なくひろびろして、やつてくるひとたちの身なりもきれいだ。

「僕、今度は＼のかばんがいい」

小学生でさえ、あたりまえに高級品を持つてゐる。財政難にあえぐほかの町のことなど、みんな、ばかにして見ていた。貧乏とは無縁の生活は、ただただ贅沢と幸福しかない。なぜほかの町が苦労しているのかなど、考えたことは一度もなかつた。

私たちの知らなかつた審判の日である今日は、体育祭まであと一日に迫つていた。数日続いた天候不順でグラウンドの設営は遅れに遅れ、その日の午後をすべて準備にあてることになつた。私は実況や連絡のための放送機材を、グラウンドに近い一階、廊下のはしに運ぶ当番にされ、校舎とグラウンドを何度も往復した。開会式や閉会式で使うマイクスタンドは、隣接する中学校の校舎から借りなければ足りない。普段目にしない機械たちはどれも重く、三十分もすると、暑さとあいまつてどつと疲れた。ひと段落したところで後輩たちに任せて、ちょっと日陰で休憩、と、高校校舎のコンクリート製の外階段の一端目にこしかけた。

したたりおちる汗をハンカチでぬぐつてゐると、そよ風が首筋を吹き抜けていった。気持ちよさに、しばらく目を閉じて呼吸をゆくりとする。制服のスカートのすそを少し持ち上げ、熱くなつた足を冷ます。靴下もスニーカーも、いつそ脱いでしまつたかった。早

朝から日がくらむよくなまぶしい光を浴び続けて、ちょっとぼうつとする　遠い山の空は青く澄みきって、その日、町のにんげんは久しぶりにまるい太陽の姿を見た。

もしも雨だつたなら、私たちの運命はまた別の方向に進んでいたのかもしない。だけど、そんなことをもちろん私たちは知ることもなく、ただ、体育祭のことで頭がいっぱいだつた。

遠くから、生徒たちの声がする。なんだかい感じにノスタルジックで不思議に懐かしく、やすらかな空氣に包まれてもうこのまま寝ちやいたいと思つた　　そのときだ。

突然、サイレンが鳴り始めた。火事のときになるやつだ。この時期にめずらしい、どこが燃えているんだろ？と遠くにいる同級生の声に耳をすませる。「なんだろ？」と口々に怒鳴りあつてゐるさまでして、近場で火事が起つたのではないだろ？

ちょっと不思議に思つたのは、火事で鳴る市のサイレンは、十秒ほどで音量をがくんと落として、デクレッションドして消えるのだが、今日はやけに長いなということだ。いつまでもいつまでも終わらない。一分をこえるとさすがに妙で、こつそりさぼつてゐるばつの悪さもあつてしまふしぶ立ち上がつた。グラウンドで作業をしていた同級生も先輩も後輩も、顔を見合させていた。

「なあに、これ。長すぎるよね」

「火事じゃないのか」

「故障かなにか？」

会話に加わるうと、日陰から一步踏み出しかけたとき、なにかが視界を横切つた　　いや、横切つてはいない。なにかが、上から下へものすごい速さで落ちてきた。くうをきるような音と破裂音は同時に聞こえたと思つ。視界が真っ赤に染まって、私は階段と校舎の陰に吹き飛ばされた。さらついた壁面にむきだしの腕をこすつて、ああ怪我をしたなとわかつたが、自分の傷よりも、何が起つたのか知ろうとする思いのほうが強かつた。

石段に手をついて座りこんだ。グラウンドのほうを見る。

信じられないことが起こっていた。

グラウンドの真ん中辺りが、黒く焦げてえぐれてい。爆発の直前、周囲にいたはずのみつかちゃんとちがいなくなつて、もしかしたら、黒煙のなかにうつすらと、赤と黒のかたまりにしか見えないそれがそうなのだろうか。頭の中はエクスクラメーションとクエスチョンだけで、ようやくしぼりだした答えは、隕石? だった。呆然としていると、また、打ち上げ花火があがるときの音がした。今度は背中のほうで鳴つた、どおんとすさまじい振動とともに、校舎の窓ガラスがいつせいに割れる音。

悲鳴があがつた。おそるおそる、階段の陰からはいでて、声のするほうを見た。半身に突き刺さったガラスに、半狂乱におちいった後輩たちがいた。

ぐおおおという機械的な轟音に、はっとして空を見上げる。何機もの飛行機の機影 きれいに編隊を作つて飛ぶそれらは、住宅街のうえで、何か小さな黒いものをばらばらと空中に放出している。しばらくすると、家々から真っ赤なものが吹き上がり、爆発音が何度も聞こえた。

校舎の中にいて助かつたらしい教師と生徒たちが、グラウンドに飛び出してきた。ケイホウダ、と教師の一人が叫んだ。ニゲロニゲロ。そう彼の口が動いた瞬間、上空を旋回してもどつてきた大きな飛行機が、グラウンドにむかつて何かを落とした。

人が空中を飛ぶのをはじめてみた 映画みたいだった。最初の爆発で助かつて、その場に座り込んでいた生徒たちの姿が一瞬で消えた。痛いよ、と叫んでいたガラスまみれの後輩たちも、あっけにとられたようすで立ち尽くしている。あまりに信じられないことが起ると、どんなに痛くても思考が止まってしまうのだろう。私も動けなかつた。

だが、ようやく、わけはわかつた。

飛行機が、爆弾を落としている。この町に。私たちの学校に。のどの奥からひきつれたようなうめき声が出た。いまや頭の中は

疑問符もなく真っ白で、どうして、もなんで、も言葉にならなかつた。ただ悲鳴のような声を私は上げた。そうしなければ許容範囲をこえていた。

上空を旋回する飛行機が、また黒いものをばらまいた。今度は、さつきよりも小さなコショウの粒みたいなものをたくさん。それらは、校舎とグラウンドにはじけどび、熱風と炎の渦をまきおこした。私はとっさに階段の陰に飛び込み、小さく身を縮めた。さらに悲鳴があがり、腕で顔をかばつた視界のはしに、火だるまになつたにんげんの姿がうつった。

逃げなくちゃ、と思った。安全な場所はどこだらう。学校は無理だ、もうぜつたいに。はやく、どこからかここを出たい 中学校と共に通の校門は遠すぎる。裏門も、とてもたどりつけっこない。ひらめいたのは、文化部の部室棟の裏手にあるフェンスだつた。人がひとり通れるくらいの穴があいて、コンビニへの近道に生徒がつかうので、土手が階段になつてている。ここからすぐだ。

校舎のうんと奥ならおそらく大丈夫、ということに思い至らなかつたのは、まさにパニックに陥つていただからだらう。ぜつたいに安全である場所として思い浮かんだのはやつぱり自分のうちで、とにかくまず帰りたいというこの判断が、私と、先輩をはじめとする学校のみんなとの運命をわけたことを私はまだ知らなかつた。

とにかくあたりをうかがいながら階段わきのくぼみから這い出し、火の手の少ない渡り廊下のほうへ向かつた。体育館に大きな穴がいくつもあいて、火がくすぶつてているのが見えた。体育の先生が、そばで消火器を持つてうろうろしている。すぐ横を通り過ぎたのに気づかれなかつた。

炎による熱気がどこもかしこもあつた。煙がしみて涙がぼろぼろ出た。ひどいにおいがきついし、聞こえてくる怒鳴り声や悲鳴が怖い。もつれそうになる足を必死で動かす。

たどりついた文化部の部室棟建物は、はしつこからめらめらと燃えていたが、スカートを持ち上げ、飛び越えるようにして駆け抜け

る。茂つた草にはんぶん隠れているフェンスの穴をぐぐつて、私はなんとか学校から出た。近くには誰もいなかつた。柔らかい地面からアスファルトの上に降り立つと、煙の量がちょっと減つた。視界が晴れたので、涙と鼻水でべとべとの顔を袖でぬぐつた。どかんどかんとすごい音　町じゅうぜんぶがフライパンの中でいためられているみたいだ。

小学校にいる弟が心配だつた。連れて一人で帰りたいけれど、ここからどう行けばいいのだろうか。住宅街に入ると、燃え盛る家々から逃げ出すひとたちと一緒になつた。

「あの、小学校に行きたいんです。あつちは、火は」

「子どもたちなら、先生とさつきここを通つてとっくに逃げたよ。わたしたちもいこうまあちゃん、一緒に」

顔見知りのおばあさんが、私を見て言つた。大きな旅行バッグを背負うようにして持つていた。

「大きな道はだめだ、小さい飛行機が、どんどん機関銃を使つてる、車はだめ」

道端に、にんげんの死体があつた。もうむしろ夢みたいだ。すぐ後ろで、すさまじい振動と熱量をともなつて、焼きつくされた家が倒壊する。おばあさんと一緒に、私は走り出した。おばあさんはずっと念仏をとなえていた。呼吸するたびにのどがぴりつとして苦しいのにやめなかつた。そのうち、おばあさんは私のスピードに遅れ始めた。「先にいきな」というのに「わかつた、気をつけて」と怒鳴る。角を曲がつて浜辺への道にはいったとき、すぐ後ろで打ち上げ花火の音がした。

どおん、という振動とともに、私はなにか強いものに背中を押されて転んだ。ふいに足元がなくなつた感覚のあと、体中に衝撃がはしり、ぶつりと視界がどぎれて真つ暗になつた。

気がついたとき、私は水の中にいた。口の中に泥と血のにおいがして、全身がぬれていた。体を起こしてあたりを見る。コンクリートの壁の上は空。水路に落ちたんだ、と思つた。

直前になにをしていたかゆっくり思い出す。うしろに爆弾がおちて、その爆風かなにかで吹き飛ばされた？ よくわからないが、それ以外にここにいる理由がない。ぐしょぐしょのスニーカーの感触に辟易しながら、全身ずぶぬれでようよと立ち上がる。広い水路のあちこちで、いろんな残骸が目に入った。おばあさんの持つていたバッグが、半分、底の土にめりこむようにして転がっていた。無事だろうか。どのくらい水の中に寝ていたのかわからない、きっとほんの少しのあいだだろうと思うけど、ここにいる私に気づかなかつたのなら、たぶんもう遠くにいつてしまつたのだろう。

水路は生活排水を流すためのもので、生臭くて汚れている。頭痛に気づいて頭に手をやると、こぶができるのがわかつた。全身がぎしぎし痛い。バッグを拾い上げる気力もなくコンクリートの壁を見上げる。私の背より高く、つるつるで登れそうにない。おまけにどこにむかつて走つていたのかもわからなくなつた。前後にまつすぐ続く水路は、前も後ろも、暗い天井でそのままおわれてしまう。

おちたのは私ひとりきり。ほかに頼れる人はいないし、ぐずぐずしてもいられない。おちるまえは海の方にむかつていたのだから、そちらに行きたいと思つたけれど、方角を知りようもない。なかばやけくそ氣味に、私はそのまま向いていたほうに進むことにした。歩いているうちに、なぜかしらまた涙が出てきた。

数分もすると、頭の上がコンクリートのふたでおおわれてまづくらになる。聞こえるのはものが燃えて崩れる音だけ、怖い、心細い、どうしたらしいのかわからない。ぐすぐす泣きながら、ただ、歩くのをやめるわけにはいかないといつことだけで、必死で足を動かした。

道がだんだん細く狭くなる。よつんぱいですすまなければならぬい場所にくると、天井が頭のすぐ上になり、ここならじゅづぶん出られると思つたけれど無理だつた。途中でおおきくまがつた水路は、町のメインストリートにあたる道路を横断していくらしく、頭上を

ものす」「いいきおいで、重くて大きなものが通つていったからだ。一緒に、激しい怒鳴り声もした 生き残つてゐやつを探せ、といふ命令口調に答える「はい」という言葉と、単発で何度も聞こえる銃声。これだけで、見つけだされたら最後だということを悟るのにじゅうぶんだった。

戦争、と漠然と思つた。

進むべき方向を間違えたことに気づいたのは、はいつくばつて十五分もたつたころだ。ひきかえそうにも、後退する体力はもうないので、手探りで進み続けた。おばあさんのように、「死にたくないよう」「痛い、怖い」「ママ」という念佛と大差のない言葉が交互に出た。

やがて、水路は再び、太く広い幅をもつものにかわつた。傷だらけのひざと手のひらをのばして立つて歩く。流れる水がだんだん澄んできたころ、唐突にいきどまりにつきあたつた。天井はコンクリートのふたから、鉄でできた格子のふたになり、排水溝の穴が三つ、それぞれの壁の真ん中についている。高さは、背伸びをすればじゅうぶんとどくくらいだ。底は泥があく、水の流れはほとんどない。排水溝の穴に足をかければ登れそうだった。

だんだん、ここにずっといれば助かるのではないかと思い始めていたが、上から差し込む光への欲望に勝てなかつた。死ぬなら明るいところで死にたいと切に思つた。それに、ここでは悲鳴がまったく聞こえないでの、たぶんきっと大丈夫。爆音よりもしろ蝉の鳴き声が近いほどなのだ。足をふんばつて、鉄のふたをゆっくり押し上げる。手をやけどしていることに、このときはじめて気づいたが、さらに力をふりしぼつて、ふたをずらした。半分ほど隙間があつたところで、へりに手をかけ、つまさきをかけてよじ登る。

数十分ぶりの外はまぶしかつた。立ち上ると、あたりには建物はない、目の前には緑が広がるばかりだつた。炎の気配はないぐるりと周囲を見渡す。はるか向こうに、高校の校舎と、赤色に染まるショッピングモール、それから、パパの会社のビルと町役場の

展望タワー。地理はいちばん苦手だったが、目印になる建物を順に追つうちに、自分がどこにたどりついたのかなんとなくわかった。水路はすこしづつ傾斜して、私は山のほうへと向かっていたのだ。鉱山施設に登る道のふもとだ。赤い喧騒がうそのように静まり返つていて、ようやくちゃんと呼吸ができた。

いまさら海のほうへは行けなかつた。私は曲がりくねつた道を、山へと歩き始めた。

そして、キャンプ場に入る道で、小学校に入るか入らないくらいの、小さな男の子と一緒になつた。

つい昨晚のこと思い出す。ママがつくつた夜じはんは、マッシュルームにたまねぎたっぷりのビーフシチュー、ふんわりとお皿に盛られた鮮やかなたんぽぽ色サフランライスとレタスサラダだつた。ぜんぶ私の好きなメニューで、体重が気になるけど、パパといつしょにおかわりしようつかどうか迷つた。

じはんのあとは、弟と一緒にゲームをした。最後のバスを倒して、おおよろこびした。

まるで遠い夏の陽炎のようと思ひ出されて、家族の笑顔は、いやな予感とともに私の頭を占拠した。

「ああ、これだけ残つてたか」

モニターのひとつがきりかわる。固定カメラではなく、誰かが撮つている映像のようだ。

戦闘機による爆撃はすでに終わつて、町では戦車と兵隊による制圧がはじまつていた。彼らは引きと行動し、建物の中に隠れていた住人をかたつぱしから引きずり出していた。あるものはせんざん抵抗して、あるものはおとなしくしたがつた末に銃弾をうちこまれたり剣でつかれたりして殺されていた。顔見知りの町役場のお兄さんが刺されてから、もうモニターを見る気もなくうなだれていた

私は、男のひとりごとめいた咳きに、ふと數十分ぶりに画面を見上げ、カップに口をつけたまま釘付けになつた。揺れ動く画面は、高校のグラウンドだ。戦車が何台も連なり、迷彩服に銃を持った男のひとたちがたくさんいる。彼らと少しほなれたところには、小さい子どもや老人たちが集められていた。よりそうように一箇所にかたまつて座り込んでいる彼らの表情は暗い。取り囲むように立つた五人の兵隊が、みんなに銃を向けているからだ。

隣の男の子が、びくっと震えて、私の腕をつかんだ。彼は、映像を食い入るように見つめはじめる。ちいちゃんだかみいちゃんだか、女の子の名前を呼んだ。私はモニターに視線をもどす。画面の中では、銃を持った兵士たちが笑顔で話していたが、ふいにアップになつていた。ひとりの小さな女の子が、老人の肩にしがみついて泣いている。

「ちいちゃん？」

「ちいちゃん　ともだち」

男の子はそれだけ言つて黙つた。幼稚園の名札をつけているちいちゃんは、不安そうにカメラのレンズを見ている。と、ふたたび映像は兵士たちにもどり、五人の兵士のもとに、ほかの兵隊たちがかわつた銃を持って集まってきた。もち手の部分が分厚く、下部分にタンクのようなものが装てんされている。先のほうは、ほかの兵士がもつているのとくらべて円筒形がずいぶん太く、ふうがわりな大きなレバーのようなものがついていた。

一人の兵士の合図で、みんなにそのかわつた銃が向けられる。次の瞬間、レバーがひかれ、銃口から、いつせいに炎がふきだした。銃ではなく、火炎放射器だつたのだ　あつというまにみんな火に飲み込まれる。泣き叫び逃げようとする彼らに、容赦なく炎が浴びせられ、呆然とする私たちの前で、町のひとたちは黒焦げになつて死んでいった。もちろん、小さなちいちゃんも。

男の子が泣きはじめた。しがみついてくる背中をなでてやることしかできない。そして私は、あんなふうに人が死ぬ場面を見るのは

ショックだったが、いたのが老人とごく幼い子どもだけだったことを疑問に思っていた。

「お、まだいたか」

画面がまたきりかわる。映し出された光景に、私ともうひとり、おばさんの横にいた生存者が息を飲むのがわかつた。顔を見合せていると、目の前の男が笑って「そういえば、君たち仲がよかつたねえ」と呟いた。

先輩。私たちのマドンナが、二人の兵士に、昇降口から引きずり出されるところだった。もともと校舎の中にいて、ずっと隠れていたようだ。校庭でサッカーをしていた兵士たちも気づき、ボールを蹴りながらやつてきた。大勢にとりかこまれて、先輩は何か大声で叫んでいる。彼女にむかってボールが蹴られた。それが血と砂まみれになつたにんげんの頭部だということに、私はやつと気づいた。先輩のきれいな顔が驚愕と恐怖にゆがむ。先輩、と呟いても届かないことがわかつっていても、呼ばずにはいられなかつた。男が笑う。

救いのないことはわつきわかつていたはずなのに、まだそれは終わらなかつたのだ

生首をつきつけられて逃げるすべもなく座り込む先輩の胸を、ふいに兵士のひとりが力いっぱい蹴つた。後ろに倒れこんだ先輩に、ほかの兵士たちが馬乗りになる。スカートがめくれて、細い足がばたばたと空気をかいだ。そこで画面はぶれ、地面がいっぱいに映し出された。カメラマンが撮影を放棄したのだ。やがて、ぶつりと映像自体が切れた。

「まあこのくらいは役得だらうな。この町にはもつたいないくらいの美人だね。うらやましいことだ」

男は、くるりと椅子ごと回転して、私たちを見た。

「さて、もう説明したほうがいいかな。どうしてこの町がこんなふうになつてしているのか」

理不尽な襲撃、無抵抗の住民に対する不当な弾圧。それらがなぜ

行われたのか、もつとも知りたいことだつた。恋人の名前を呼んでいた勤労青年も、顔をあげて男を見つめていた。自分たちだけたいした怪我もなくここにいる罪悪感に狂いだしそうな四人にむかって、男が「それでは」と口を開いた。

しかし、男が説明する前に、低い電子音が鳴り響いた。施設に人が来たことを告げるものだ。男は「ああ、君たちの仲間かな」と立ち上がる。ややたつて、男と一緒に入ってきた人物を見てとても驚いた。それは、よく知つた幼馴染で同級生だった。

「かわうそ、生きてたか」

私にむかつてそういう相手の名前を呼ばうとして声がつまつた。萱森は、学生服のシャツもズボンも、どろどろの汚物にまみれて、足元ははだしだつた。彼は四人を順番に見て、厳しい表情をする。「これだけ」と彼はうめいた。

「三千人もいて、これだけしかここに来なかつたのか」

「そうなんだよ。残念だけどね」

男は肩をすくめた。

「この町のみんな、ちゃんと一度は説明を受けているはずなんだけどね。この山だけはなにがあつても安全だつて。君たちのお母さんくらいの世代から、学校行事でからずここに来ることになつてるから、道がわからないなんていうのはいいつこなし」

「戦車が山に行く道をふさいでいた。よくもそんなこと」

「私は知らない。軍にいってくれ」

慣れた様子で交わされる会話

どうも顔見知りらしい萱森と施

設の管理人だという男の台詞は、事態のなにもかもを把握しているふうで気にかかつた。成長するにつれて交流の少なくなつた男子のうちのひとりである萱森と、それでもこの場でいちばん親しいのは私だ。「萱森」とよびかけると、彼はこちらをふりむいた。男は「お茶をいれてくる」と言つて、キッチンや風呂場がある方向へ去つていいく。

もう何年も、まともに顔を見たことのない同級生は、手のひらで

顔をこすりながら私を見下ろし、「ひとのことは言えないけど、す
ごいかつこうだな」とつぶやいた。「水路に落ちた」というと、「
そう」と疲れた顔でため息をつく。彼と一緒に遊んだのはずいぶん
前、小学生だったときが最後だ。中学校にはいったあたりから、彼
は不真面目な連中、あまり勉強熱心でない先輩たちとつきあうよう
になり、家は近所なのに急激に疎遠になつた。

「おかあさんは」

年月をうめるため、彼のたつたひとりの肉親について、私は急いで尋ねた。

萱森の両親が、なみなみならない経緯をへて離婚した事実は、この町の暗黙の、そして共通の知識としてあつた。国會議員までつとめた地元の名士であるおじいさんが亡くなつてからというもの、母親と二人、助け合つて暮らすつましさは、中学にはいるまでの彼がどびぬけて利発で素直な少年だつたからこそ評判で、変化も仕方のないこととして受け入れられてきたのだ。いつも押し黙つて、口を開けば世の中を揶揄してばかり、仲間以外にはめったに笑顔を見せなくなつた萱森は、私の質問にだまつて首をふつた。

「そう

「見てきたけど、うちも含め、あの辺は全部燃えた」

「帰つたの、どうやつて」

「買出して近くにいた」

あの辺、というのに私の家も含まれていると知つて落胆した私を慰めるように、萱森は、私の頭に手を置いた。どうやつてここに、と小声でたずねると「下水道」と呴いた。

「そう それで、ねえ、あの人のことば」

「じいちゃんが議員だつたとき、たまにつむぎに来てた。いつかはわからぬけど、この町が攻撃されることはずつと前から決まってたんだ」

実験戦場、と小声で言つて、萱森は、キッチンから投げられたタオルを取る。実験戦場。ひとつひとつに漢字を当てはめると、たし

かにこの状況に説明がついたような気がした。

「お茶は紅茶がいいかい、コーヒーもあるけど」

「緑茶」

「それは、ちょっと時間がかかるよ。お菓子でも食べてて」
萱森はモニターに近づく。涙がこぼれないよう、必死で目を見開いてこぶしを握り締めるさまは、昔の彼にもどったようだった。画面のなかでこげた廃墟と化した町は、生物の気配がまるで感じられない。なにかを探すように、彼の視線はモニターの上をさまよう

まず、海岸の様子に、彼は息をのんだ。堤防に追い詰められて一斉射撃でやられたたくさんの町の人の死体。沖に巨大な船 戦艦

といふものなのだろう、それが何隻も浮かんでいる。夕闇の中で、影が巨大な壁のようだ。

想像よりずっとひじかっただのだろう、呼吸を忘れたように、じくりとつばをのむ音。やがて、その左斜め上の、見慣れた校舎の映像を見つけて彼は硬直した。中学校の 正面玄関の前に、制服やスリッパ姿の死体が山積みになっている。凝視したあと、ふいにはっとした彼はデスクに両腕をつっぱって、くずれおちるのを防ぐようにしてうなだれた。

「三沢に一緒に行こうって言つたんだ。近くにいるやつだけでも一緒に逃げれば助かると思って。でも、中学に妹がいるからつて別れて、だめだとも言えなかつた」

ぼそぼそと告げた内容は、言い訳のようでもあり、懺悔のようでもあった。言われてよく見ると、中学校の死体のなかにひとりだけ、高校の制服の、スラックスの大きな足がのぞいている。男子のくるぶし 三沢が彼のいちばんの親友で、今朝も元気にふざけあつているのを見ていたから、私まで、がまんしていた涙がこぼれた。「生きていても見つけだされてみんな殺される。逃げ道を用意するなんて仮の話で、ここに俺たちがいるのだつてただのラッキーで、ほんとうは誰も生かす気なんてなかつたんだ」

それを聞いたおばさんが、また泣きじゃくりはじめる。男の子も、

おかあさーん、と声をあげて床に顔を伏せる。考へないようにしていたけれど、私ももう一度と家族に会えないということを思い知らされて全身の力が抜けた。萱森が、肩を抱いて支えてくれなかつたら、とても立つていられなかつただろう。

「おまたせ」

手にマグカップを持つて、男がもどつてきた。部外者だからか、ひとりだけとても陽気だ。彼は、私たちをみておやおやといつよいに笑う。

「邪魔したかな。同級生が一人とは、なかなかすごい確率だからね」むつとして顔をあげた私をじつとみつめた萱森はなにかを言いたそうだった。私は、反論するためには萱森が男をふりむいたのだと思った。だが、どこに持つていたのか、彼が取り出した銃がすさまじい音をたてて男にむかつて発砲された。胸のまんなかを打ち抜いた銃と、男が持っていた緑茶のカップが床に落ちるのは同時で、両方も陸にあがつた魚のように、無力に床に転がつた。

反動で彼の背を抱えるように後ろに倒れた私は、あぜんとして、萱森の顔をのぞきこむ。彼は何も言つことなくゆっくり起き上がり、まつすぐに立つた。そのまま銃をひらう。目を見開いたまま、ぬれた床の上で動かない男にむかつて、さらに、迷う様子もなく頭へと残りの銃弾を打ち込んだ。

耳がじんとするような銃声が消えると、萱森は武器を捨てた。私をひっぱつて起き上がらせると、全身に怒りをみなぎらせて、うしろでびっくりしている三人に言った。

「いまなら、仇をとれる。生きているひとはもういこへこられない。つかまつて殺されるか、先輩みたいにひどいめにあつたあとに殺される」

高校の校庭で焼けて死んだ遺体の山に、もうひとつ死体が投げ込まれたところだった。先輩だ 全裸で、手足がすべて変な方向に曲がっていた。勤労青年が、萱森の言葉に、震える声で尋ねた。

「どうやって。どうすれば」

「「」の町は、このあと調査されて、存在自体がなかつたことにされる。町の地下に爆弾が埋まつてゐるんだ。それが爆発すれば、町は何もないただの穴になる。爆弾のスイッチはたぶんこれ」

萱森は、デスクのいちばんはしづこにあつた、プラスチックケースに覆われた赤いボタンを指差した。勤労青年は立ち上がり、萱森の隣に並ぶ。淡々とした説明を、私とほかの三人は黙つて聞いた。

「全部すんだら、国のえらいやつらがここにきてこのボタンを押す。十年前、じいちゃんと話していたこいつがたしかにそう言つた

今押せば、みんなを殺したやつを町ごと殺せる」

「でも、そうしたら、ここも崩れてしまふんじゃないか」

勤労青年が、ぐるりと部屋を見渡した。地下三階だてのうち、地下下一階にこの部屋はあつた。男の言葉では、さらに下へ降りる階段が隣の部屋にあつて、炭鉱の坑道につながつてゐるはずだ。

萱森は首を振つた。

「この施設は、俺たちの町の監視場所で、炭鉱の跡地なんかじゃない。坑道つていうのもうそ、おえらがたや管理人用の抜け穴になつてるんだ。そこから脱出できると思つ」

逃げてもけつゝくつかまつて罪に問われ、殺されるのではないか、という質問を誰もしなかつた。おばさんも小学生も立ち上がり、無言で私たちによりそつた。心はひとつだつた。

遠くに光が見える。数時間線路の脇で肩をならべて眠つたあと歩きはじめてもうだいぶたつ。勤労青年が持ちだした置時計のバックライトが、変わつた日付と夜明けをしめしていた。

「あさま町と一緒に死んだほうがよかつたかもな」

こいつのふざけるような口調で呟いた萱森に、だれひとり返事を

するものはなかつた。私は棒のようになつた足を交互に動かしながら、ぼんやりする頭で、さつきみた短い夢を思いだす。

私たちの自慢の町「ごみひとつない街角、ないものはない種種の施設、きれいに整備された道をずっと歩いた先に、私はいつもの海を見るのだ。白い砂浜に青くきらめく波濤、聞こえてくる子どもたちのはしゃぐ声。真昼の光をいっぱいにあびて、そこはまるで楽園、終わりのない平和の檻だった。

いつものようにソテツの木陰に座つて足を投げ出していると、私の田の前を親しいひとたちが楽しそうに通り過ぎていく。

「まあやー、泳ごうよ」

水着にパークーを羽織つた弟がやつてきて陽気に誘つ。日傘をさしながらのんびり浜辺を歩いていたママと、お供よろしくお弁当のバスケットを持ったパパも、ここにこしながらやつてきた。

「少しせいいなら　うん、いいよ。一緒にいこうか

現実ではないと知りながらも強く、せめて今はみんなが一緒にいることだけを願つた私は、「ごめんなさい」と呟いてひとつぶだけ涙をこぼした。

まあ　夢からさめるときがくる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4530w/>

戦場の管理者

2011年9月6日03時24分発行